

精神科救急医療を支える、瀬野川病院の挑戦

いつでも、どこでも、だれでも

interview 下原千夏 理事長 津久江亮太郎 院長



365日・24時間体制の精神科救急医療センター 医療法人せのかわ



しもはら・ちか 2012年 理事長就任/心理療法師 精神保健福祉士 つかえ・りょうたろう 私立 徳島高等学校 卒業 東北大学医学部 卒業



■生活訓練施設や就労支援施設、病院が用意したアパートなど、精神科の治療や社会復帰訓練において必要な「資源」がほとんどそろっています。下原理事長（以下、下原）父でもある前理事長の時代で作った施設が多いのですが、設立した時に父が持っていた「障がい者の社会復帰にむけた情熱」は、引き継いでいきたいと思っています。3年前から理事長を務めており、それまでは心理療法師として仕事をし



■治療の方針をお聞かせください。 下原 江口川までの精神科医療では、基本的に精神症状である幻覚、妄想、気持ちの落ち込みなどを薬で改善して戻しする考えが支配的でした。1症状が良くなればそれでよ

なっていました。施設勤務にわたったのを機に精神保健福祉士資格も取得して、患者さんの社会復帰に携わっています。 退院された方を施設で見守り、少しずつステップアップできるように生活のサポートをしています。が、再発され方もいるため、精神科障がい者の社会復帰の難しさを実感しています。 患者さんに痛みを理解してもらって、服薬の大切さを受け取ってもらうにはどうしたらいいのかが、細いけれど大きな問題まで、これまでに学んだことは大きかったと思います。 江口川までの精神科医療では、基本的に精神症状である幻覚、妄想、気持ちの落ち込みなどを薬で改善して戻しする考えが支配的でした。1症状が良くなればそれでよ

かつていない点も多かったです。患者さんの回復の可能性を引き出す環境を整えることは大切なことだと思います。 精神科障がい者との共生を阻むのは、下原君のほうではないと思います。まずは社会からの偏見があるでしょう。医療の現場ですら、持たれる医師からも偏見を持たれることもありまして、障がい者自身も自分で偏見を抱くままに生きていくことがあります。 仕事を始めるころは、社会復帰ですが、こういった社会環境においては、自宅に帰ることだけでは社会復帰の道と見えても、本人にしてみれば、自分たちで限界を作っていることも多いので、それを解消することが必要ではないでしょうか。 津久江立江院は「一見ゆえな病気で、それゆえな病気の症状を理解し難い現象」とさえ、身構



新設した室内のトレーニングコートには、バドミントンコート2面、ソフトバレーコート1面がとれるスペースを確保。外部にもテニスコート1面を備え、プロテニスプレーヤーも指導に訪れる。



▲病院が保有する農園。農作業体験でストレスが軽減され、症状が改善することもある。



①広域ひきこもり相談支援センター ②ジョブハウス・ノイエには、「お好み焼・のいえ」(就労移行支援事業所)、「ペーカリー・ノイエ」(就労継続支援B型事業所)が入る。③お好み焼『のいえ』の店内。④隣接するペーカリー「neue」。⑤柔道場では、小学生向けの柔道教室も開催。地域との交流の場となっている。⑥県からの委託事業でひきこもり相談も行っている。⑦患者や職員がさまざまな競技大会に出場して獲得したトロフィーの数々。スポーツを得意とする職員が多く、プロボクシングの元日本スーパーフライ級王者(中広大悟さん)も在籍する。⑧精神科救急医療センターとして、24時間、365日体制で救急を受け入れている。

「せのかわ」の風景

①ジョブハウス・ノイエには、「お好み焼・のいえ」(就労移行支援事業所)、「ペーカリー・ノイエ」(就労継続支援B型事業所)が入る。②お好み焼『のいえ』の店内。③隣接するペーカリー「neue」。⑤柔道場では、小学生向けの柔道教室も開催。地域との交流の場となっている。⑥県からの委託事業でひきこもり相談も行っている。⑦患者や職員がさまざまな競技大会に出場して獲得したトロフィーの数々。スポーツを得意とする職員が多く、プロボクシングの元日本スーパーフライ級王者(中広大悟さん)も在籍する。⑧精神科救急医療センターとして、24時間、365日体制で救急を受け入れている。

今後は、たとえば「アパルトメント」が何年か経ったあと、お客さんに「このお店で、元は病院や障がい者施設だったんだよ」と言われるような自立した経営状態にまで成長させたいですね。高品質なサービスを提供し、社会に貢献できるようにするのが理想です。